

介護実習ルーブリック評価結果を用いた学生の実習分析

An Analysis of Students' Practice Based on the Results of the Rubric Evaluation of Care-work Practicum

鷲尾 敦 福田 洋子
Atsushi Washio Yoko Fukuda
野呂 健一 審來 敬章
Kenichi Noro Takaaki Horai

(要約)

介護実習における評価の改善を目指し、本学高等教育研究会で介護実習ルーブリックの開発を進めている。2018年度「介護実習Ⅲ」の評価に開発ルーブリックを用い評価の改善を進めるとともに、学生の強みや弱み自己評価の傾向等を見出した。2018年度末の「介護実習Ⅱ」においてはコメント欄を付けて改良したルーブリックを用いた。分析の結果、「実習態度」は高評価であるが、「積極性」「職員との意思疎通」が課題であり、加えて日本人学生は「施設理解」が、留学生は「振り返り」や評価力が低いことが課題であった。実習時期、評価対象者が違う前回調査と比べて同様の傾向が多くあり、ルーブリック評価結果は、実習や授業、実習指導などの改善に向けた課題を明らかにした。

(キーワード)

介護実習評価、ルーブリック、実習改善、施設指導者評価、留学生

1. はじめに

本稿は、2018年度末に実施した「介護実習Ⅱ」において施設指導者及び学生が行ったルーブリック評価の分析（施設指導者と学生の評価の実態や傾向、比較検証など）を通して、ルーブリックを用いた実習評価の課題や介護教育への活用、可能性について検討することを目的としている。

2012年の文部科学省中央教育審議会答申以降、大学教育への質的転換が求められ、その潮流の中でルーブリックの必要性は主張してきた。教育効果や成果の可視化を実現する学生のパフォーマンス評価の一つとしてルーブリックは開発、導入が進められてきた（Stevens, 他 訳書 2016, p.2）。ルーブリックを活用した評価を導入することで、学生は「何がどの程度求められているのか」ということが認識可能となり、同時に評価者は「何がどの程度できたのか」を客観的な指標を用いて評価、提示、指導可能となるところに大きな特徴がある（松下 2012）。ともすれば評価者の主觀や曖昧な評価基準のままで、学生自身がどのように改善すればよいのか漠然としたまま評価されてきたことは大きな問題を含んでいるはずである。ルーブリックを用いることで、いわばブラックボックス化した評価の内実やプロセスが学生と評価者の双方が根拠も含めて共有できるというところに、教育の質的転換を実現できる可能性は大いに見出せる。

特に実習などのように、学外へ学生が出向き、学校や施設での経験や取り組みが評価されるような学習は学生が実習をする施設や学校での評価が重要となる。そのような場合、たとえ大学の授業担当者や学生がルーブリックを共有していても、実習先の指導者がルーブリックを共有できていなければ、評価

の根拠や単位認定等の基準が曖昧なままとなってしまう。しかしながら、実習でのループリック評価の導入を実証的に検討した研究は散見できる程度である（柊崎他 2018 など）。宮本他（2017）は介護実習の記録を対象としたループリック評価の活用について検討している。対象者が学習初期（1年次）であり、学生と教員の評価の妥当性や一致率などの検討から新版の策定へ向けての課題を検討している。また、林・大内（2017）の研究では、従来の評価法による評価とループリック評価を行い、その結果を分析している。分析結果からループリック評価には一定の妥当性が見いだせることが主張されている。一方で、ループリック評価の方が高い目標となっている項目が散見できること、そして実習段階での教育的配慮の必要性や学生の意欲の低下や最終目標達成までの困難さなどが指摘されている。これらの研究では、具体的な記述に関するループリック評価の導入および検討や、従来の評価方法とループリック評価法の比較検討を通して、重要な知見を見出すことができる。それは、学習初期の学生が記録についてどのように「困り感」を抱いているのかという点やループリックの妥当性だけでなく学校と実習指導者の観点の類似している点や相違点などを統計的に分析している点である。

昨年度検討した高等教育研究会の研究（福田他,2019a）では「介護実習Ⅲ」における施設指導者の評価と学生の自己評価を分析の対象とした。そこからは、協調性や守秘義務、礼儀などの汎用力に強みが見られた一方で、コミュニケーションや報告、記録に弱みが見られた。施設指導者は、特に日本人学生の積極性や職員との意思疎通に、留学生は記録に課題があると感じていることが明らかになった。このように分析の結果学生の状況が数値として現れるが、本研究では、ループリック評価の検討や学生、実習指導者の評価コメントやインタビューデータを活用しながら、事後の指導や授業の改善を視野に入れて検討している。実習評価という点において分析対象者が少ない傾向にあるという制限はあるものの、数値化することが難しい実習でのパフォーマンスを分析の俎上に載せて、今後の介護実習や介護教育の在り方の可能性を探ることが本研究の大きな意義である。

2. 開発ループリックの概要

厚生労働省の介護福祉士養成に関して「実習Ⅰ」「実習Ⅱ」が時間内容等について設定されているが、本学では、「実習Ⅱ」を「介護実習Ⅱ」「介護実習Ⅲ」という2つの実習科目に分けて実施している。その介護実習における評価の課題解決のための方法として本研究会はループリック評価に着目した。三重県の介護福祉施設と連携しながら、評価項目や基準、記述語について検討し、施設指導者等の意見も聞きながらループリックの試作を重ね開発を進めた。2016年度に検討を始め、2017年度に汎用力ループリックを試作、2018年度には「介護実習Ⅲ」に利用するループリックを試作し、実際の実習に適用し（福田他, 2019a,b）、結果について検証を進めている（鷲尾他, 2019）。

試作ループリックの評価の観点は、5領域16評価項目、評価着眼点25項目からなる従来の実習評価票の着眼点をベースに検討し、64指標に細分化した。基準は、当初5段階で検討したが、多くの評価の観点を効率よく評価するために、3段階に基準数を減らした。3段階は、目標（ほぼ達成）5点、中間（努力中）3点、最低（まだまだできていない）1点とした。2018年度の「介護実習Ⅲ」では、従来の評価票に評価点を転記できるよう評価の着眼点ごとに平均した点数を表記する形式であったが、ループリック

クをそのまま評価票として活用することにしたこともあり、評価着眼点ごとに学生や指導者がコメントを書けるように書式を変更した（図1）。



図1 実習IIで用いたルーブリックの構成

3. 調査方法

厚生労働省の「実習II」の指定施設である特別養護老人ホーム、老人保健施設、障害者施設において、本学介護福祉コース1年生対象の「介護実習II」をベースとした調査を次のように進めた。

- (1) 「介護実習II」の事前指導において、ルーブリックを提示し目標や評価について説明をした。
- (2) 「介護実習II」を実施した。対象学生は、16名(日本人学生9名、留学生7名)、期間は2019年2月10日～3月9日で、実習先は、10施設(特養7、老健2、障害者支援1)である。
- (3) 実習後、実習先施設指導者によるルーブリック評価を実施し、学生成績に反映させた。
- (4) 実習後、学生に同じルーブリックで自己評価をさせた。

4. ルーブリック評価データの分析

4. 1 学生自己評価の傾向

(1) 日本人学生と留学生の傾向比較

学生による自己評価結果を日本人と留学生で比較すると、総平均が日本人3.79、留学生4.40となり、留学生のほうが高く評価している（表1）。図2の評価の総平均の分布に示すように、高い評価をつける

表1 評価の総平均

	自己評価	施設評価
日本人	3.79	3.94
留学生	4.40	3.88

留学生が多く、日本人学生の6割は留学生に比べ低い評価となっている。評価領域別では、どの領域も大きな差があったが、特に「自己目標」で日本人3.70、留学生4.57と0.87、「施設理解」で日本人3.53、

留学生 4.39 と 0.86 の開きがあった。評価着眼点別(図 4)では、「コミュニケーション」の「職員との意思疎通が図れる」が日本人 3.11、留学生 4.43 で、最も大きい差 1.32 であり、次いで、「自己目標」の「振り返り」が日本人 3.56、留学生 4.64 で 1.09、「施設理解」の「施設が地域で果たす役割や機能を理解している」が日本人 3.00、留学生 4.00 で 1.00 の差であった。評価着眼点別では、日本人が高いものはなかったが、評価指標別（表 2）では、「実習態度」の「遅刻や欠席をする場合は、実習先と学校に連絡する」（日本人 5.00、留学生 4.86）、「決められた時間に遅刻しないように余裕をもって行動する」（日本人 4.78、留学生 4.71）、「コミュニケーション」の「受け持ち利用者とのコミュニケーションは円滑である」（日本人 4.22、留学生 4.14）の 3 つで日本人のほうが高かった。

留学生の「コミュニケーション」についての自己評価を日本人と比較すると、日本人は「利用者との意思疎通が図れる」に比べ「職員との意思疎通が図れる」が大幅に低いが、留学生は「利用者との意思疎通が図れる」よりも「職員との意思疎通が図れる」を高く評価しており、対照的な結果となった。

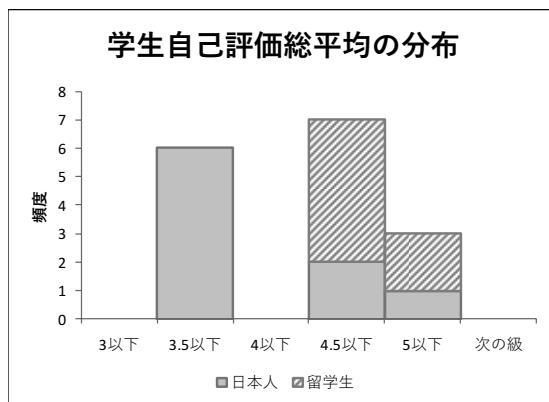


図 2 学生自己評価の総平均の分布

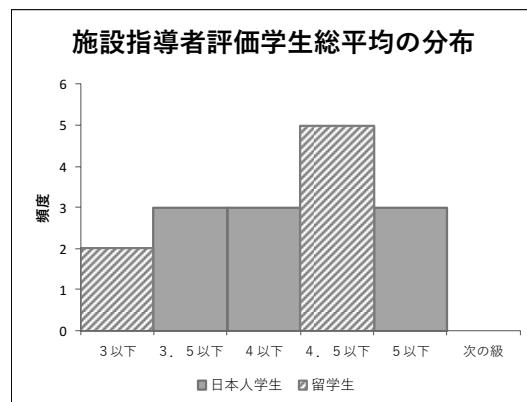


図 3 施設指導者評価の総平均の分布

（2）日本人学生の特徴

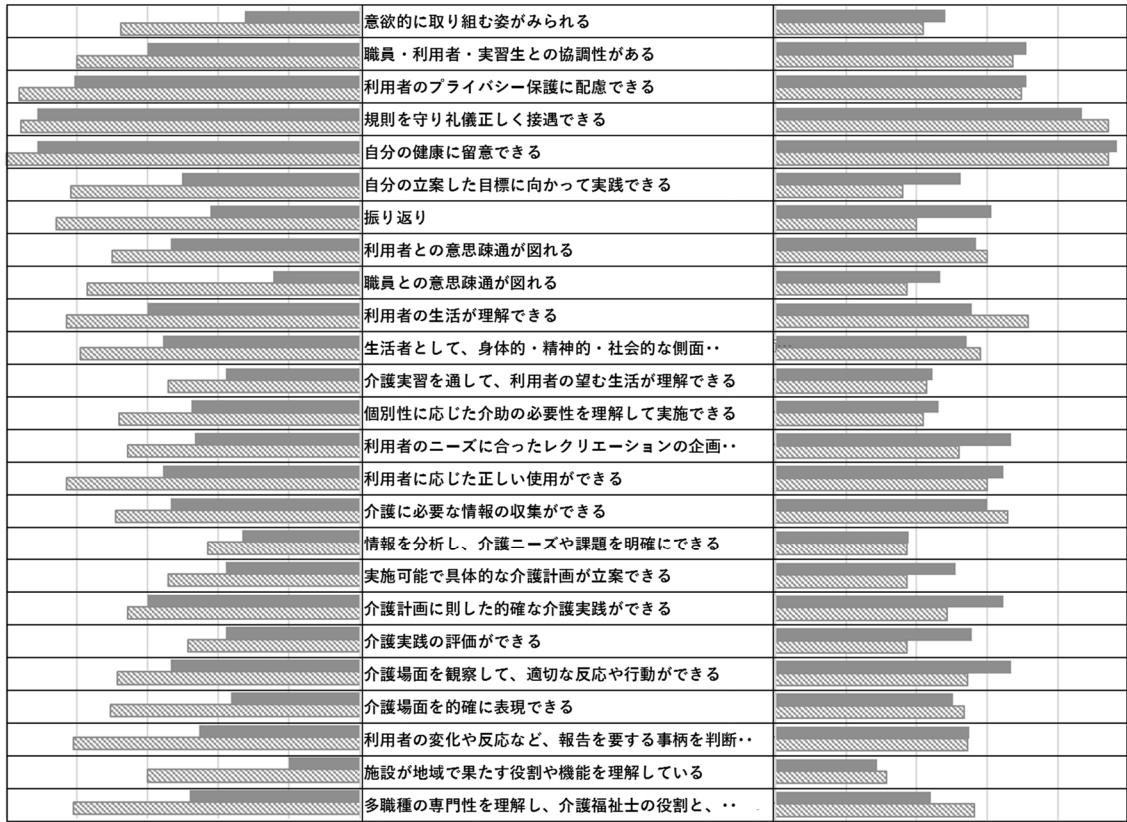
日本人は留学生に比べ全般的に自己評価が低いが、その中にあって、比較的高い傾向にあったのは「実習態度」の「守秘義務」「礼儀」「健康管理」であった。中でも、「礼儀」の「遅刻や欠席をする場合は、実習先と学校に連絡する」、「健康管理」の「体調管理ができ、欠席や早退がない」の自己評価が高かった。一方、自己評価が低いのは、「施設の理解」及び「実習態度」の「積極性」であった。

（3）留学生の特徴

留学生で特に自己評価の高い傾向にあるのは「実習態度」、特に、「守秘義務」「礼儀」「健康管理」である。中でも、「守秘義務」の「利用者のプライバシー保護のため、実習記録やレポートの作成・管理を慎重に行う」、「礼儀」の「朝の挨拶、帰りの挨拶を行うなど、礼儀正しく行動する」「提出物の提出日時や提出場所を守る」、「健康管理」の「体調管理ができ、欠席や早退がない」「自己管理ができ、元気で実習に取り組める」の 5 つの評価指標については、全員が評価点 5 をつけている（表 2）。一方、自己評価の低い傾向にあるのは「介護活動」の「受け持ち利用者の介護過程の展開」、特に「情報を分析し、介護ニーズや課題を明確にできる」「介護実践の評価ができる」「実施可能で具体的な介護計画が立案できる」である。そのほか、「コミュニケーション」も全般的に自己評価が低かった。

学生自己評価（着眼点別）

5.00 4.50 4.00 3.50 3.00 2.50



実習指導者評価（着眼点別）

2.50 3.00 3.50 4.00 4.50 5.00

■日本人 □留学生

図4 評価着眼点別の学生自己評価と施設指導者による評価

4. 2 実習施設指導者による評価の傾向

(1) 日本人学生と留学生の傾向比較

学生による自己評価では、日本人と留学生の間に差が見られたのに対し、実習施設指導者による評価は、日本人が若干高い程度で全体的にはほとんど差はなかった（表1）。個々の学生の総平均得点の分布は図3に示す通りである。留学生は低い学生と高い学生に二分される。日本人学生に特に高い学生がいることがわかる。評価領域別で見ると、「自己目標」で日本人のほうが高評価であった（日本人3.87、留学生3.43）のに対し、「施設理解」では留学生のほうが高かった（日本人3.50、留学生3.75）。「介護活動」について、全体では大きな違いはなかったが、評価項目別に見ると、「受け持ち利用者理解」で留学生の評価が高く、「受け持ち利用者の介護過程の展開」では日本人の評価が高かった。「実習態度」「コミュニケーション」では大きな差はなかった。評価着眼点別（図4）で差が大きかったものを見ると、「自己目標」の「振り返り」（日本人4.03、留学生3.50）と「自分の立案した目標に向かって実践できる」（日本人3.81、留学生3.40）、「介護活動」の「介護実践の評価ができる」（日本人3.89、留学生3.43）で日本人の評価が高く、「介護活動」の「利用者の生活が理解できる」（日本人3.89、留学生4.29）、「施設理解」の「職種の理解」（日本人3.60、留学生3.90）で留学生の評価のほうが高かった。

表2 評価指標別のループリック評価得点一覧（実習施設指導者による評価と自己評価）

領域	項目	評価着眼点	評価指標（目標）	実習施設指導者評価指標			学生自己評価評価指標		
				全体	日本人	留学生	全体	日本人	留学生
実習態度	積極性	意欲的に取り組む姿がみられる	興味や関心をもって行動する	3.53	3.50	3.57	3.38	3.00	3.86
			わからないことを聞き、聞いた上で問題を解決し、行動に移す	3.84	4.17	3.43	3.94	3.44	4.57
			実習中の学習課題に気づき、改善に努める	3.56	3.78	3.29	3.69	3.44	4.00
			実習中間・最終のカンファレンスの際に積極的に発言する	3.63	3.67	3.57	3.50	3.11	4.00
			利用者の話を聞き、必要な情報を得る	3.88	3.67	4.14	4.13	3.67	4.71
	協調性	職員・利用者・実習生との協調性がある	多職種から得た情報を活用できる	3.38	3.44	3.29	3.53	3.22	4.00
実習態度	守秘義務	利用者のプライバシー保護に配慮できる	職員の助言・指導を受け入れる	4.28	4.72	3.71	4.63	4.44	4.86
			丁寧な言葉づかいをする	4.19	4.11	4.29	4.00	3.67	4.43
			周囲の状況を考えて行動できる	4.00	3.78	4.29	3.81	3.56	4.14
	礼儀	規則を守り礼儀正しく接遇できる	相手が傷つかない関わりをする	4.47	4.50	4.43	4.44	4.33	4.57
			居室に入る時はノックをし、声かけをする	3.94	3.89	4.00	4.38	4.00	4.86
			私物に触れるときは、利用者及び職員に了解を得る	4.34	4.39	4.29	4.81	4.78	4.86
自己目標	自己目標	自己目標達成	利用者のプライバシー保護のため、実習記録やレポートの作成・管理を慎重に行う	4.50	4.56	4.43	4.88	4.78	5.00
			朝の挨拶、帰りの挨拶を行うなど、礼儀正しく行動する	4.63	4.44	4.86	4.69	4.44	5.00
			決められた時間に遅刻しないように余裕をもって行動する	4.75	4.78	4.71	4.75	4.78	4.71
	自己目標振り返り実現	自己目標達成	遅刻や欠席をする場合は、実習先と学校に連絡する	4.94	5.00	4.86	4.94	5.00	4.86
			提出物の提出日時や提出場所を守る	4.69	4.44	5.00	4.94	4.89	5.00
			体調管理ができ、欠席や早退がない	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00
コミュニケーション	意思疎通	意思疎通	自己管理ができ、元気で実習に取り組める	4.78	4.83	4.71	4.75	4.56	5.00
			毎日の目標を立案できる	4.13	4.44	3.71	4.63	4.56	4.71
			目標に向かって実践している	3.69	3.67	3.71	4.00	3.44	4.71
	意思疎通	意思疎通	指導されたことを実践に生かすことができる	3.44	3.67	3.14	4.06	3.89	4.29
			指導されたことを次の課題として明確にし、目標設定に活かすことができる	3.41	3.50	3.29	3.88	3.44	4.43
			実習自己目標が達成できた	3.50	3.78	3.14	3.94	3.44	4.57
介護活動	受け持ち利用	受け持ち利用	興味や関心を持ったことや自分の意見を職員に伝え、実習内容を振り返ることができる	3.84	3.94	3.71	4.06	3.56	4.71
			1日の実習を振り返り、次の実習のテーマや課題を見つけられる	3.75	4.11	3.29	4.00	3.56	4.57
			利用者の話を傾聴できる	4.47	4.50	4.43	4.38	4.22	4.57
	介護支援技術	介護支援技術	いろいろな利用者と話す機会を自ら作ることができる	3.88	3.67	4.14	4.00	3.67	4.43
			自分の考えを利用者に話している	3.25	3.33	3.14	3.50	3.22	3.86
			受け持ち利用者とのコミュニケーションは円滑である	4.22	4.17	4.29	4.19	4.22	4.14
施設理解	介護過程の展開	介護過程の展開	職員との意思疎通が図れる	3.56	3.67	3.43	3.69	3.11	4.43
			利用者の生活が理解できる	4.06	3.89	4.29	4.25	4.00	4.57
			生活者として、身体的・精神的・社会的な側面から個別性が理解できる	4.00	3.89	4.14	4.06	3.78	4.43
	介護活動	介護活動	受け持ち利用者の状況を把握している	4.00	3.89	4.14	4.25	4.11	4.43
			受け持ち利用者がどのような気持ちで生活しているか知った上で関わっている	3.69	3.78	3.57	4.13	3.78	4.57
			介護実習を通して、利用者の望む生活が理解できる	3.59	3.61	3.57	3.63	3.44	3.86
施設理解	介護支援技術	介護支援技術	個別性に応じた食事の介助を安全・安楽に行うことができる	3.91	4.06	3.71	4.06	3.89	4.29
			個別性に応じた移動・移乗の介助を安全・安楽に行うことができる	3.50	3.56	3.43	4.00	3.78	4.29
			個別性に応じた排泄の介助を安全・安楽に行うことができる	3.63	3.67	3.57	3.88	3.56	4.29
	介護過程の展開	介護過程の展開	個別性に応じた入浴の介助を安全・安楽に行うことができる	3.50	3.44	3.57	3.69	3.67	3.71
			個別性に応じた着脱・整容の介助を安全・安楽に行うことができる	3.50	3.56	3.43	3.94	3.56	4.43
			利用者のニーズに合ったレクリエーションの企画と実施ができる	4.04	4.17	3.80	3.88	3.67	4.14
施設理解	介護過程の展開	介護過程の展開	福祉用具の適切な使用	4.06	4.11	4.00	4.19	3.89	4.57
			利用者に合った福祉用具の使用が正しくできる	4.06	4.11	4.00	4.19	3.89	4.57
			介護に必要な情報の収集ができる	4.00	3.89	4.14	3.94	3.67	4.29
	記録	記録	利用者と関わりを持つ中で必要な情報を得ている	4.13	4.11	4.14	4.07	4.00	4.17
			職員から得た情報を利用できる	3.44	3.44	3.43	3.44	3.33	3.57
			情報分析し、介護ニーズや課題を明確にできる	3.63	3.50	4.14	3.75	3.33	4.29
施設理解	報告	報告	実施可能で具体的な介護計画が立てできる	3.63	3.78	3.43	3.63	3.44	3.86
			介護計画に則した的確な介護実践ができる	3.94	4.11	3.71	4.06	4.00	4.14
			介護実践の評価ができる	3.69	3.89	3.43	3.56	3.44	3.71
	記録	記録	介護場面を観察して、適切な反応や行動ができる	4.22	4.17	4.29	4.00	3.78	4.29
			職員の介護場面を観察し、実践に移せる	3.84	4.17	3.43	4.00	3.89	4.14
			介護場面を的確に表現できる	3.63	3.89	3.29	3.81	3.67	4.00
施設理解	施設の理解	施設の理解	目標に沿った記録ができる	3.94	4.00	3.86	4.00	3.56	4.57
			受け持ち利用者の感情の変化を、的確に記録に表現できる	3.53	3.72	3.29	3.69	3.22	4.29
	職種の理解	職種の理解	根拠に基づいた記録ができる	3.78	3.50	4.14	3.75	3.33	4.29
			実習記録に自分の考えを適切に記録できる	4.13	4.00	4.29	4.06	3.67	4.57
施設理解	職種の理解	職種の理解	誤字、脱字や訂正印が無く、丁寧に書かれている	3.75	3.44	4.14	3.38	3.00	3.86
			報告は適切な時間にメモを活用し、5W1H（いつ・どこで・誰が・何を・どのように）を明確にした内容である	3.38	3.22	3.57	3.67	3.13	4.29
	施設の理解	施設の理解	実践した内容と結果は必ず職員に報告している	4.06	3.89	4.29	4.25	3.89	4.71
			利用者の変化が見られたらすぐに職員に報告する	4.16	4.50	3.71	4.19	3.89	4.57

(2) 日本人学生の特徴

日本人学生で、施設からの評価が高かったのは「実習態度」、特に「健康管理」「礼儀」であった。中でも、「健康管理」の「体調管理ができ、欠席や早退がない」、「礼儀」の「遅刻や欠席をする場合は、実習先と学校に連絡する」は、全施設が評価点5をつけていた。一方で実習態度の中で「積極性」が低い。その他、「礼儀」の「決められた時間に遅刻しないように余裕をもって行動する」、「健康管理」の「自己管理ができ、元気で実習に取り組める」も高評価であった。一方、「施設理解」の評価が、他に比べて著しく低い。特に「施設が地域で果たす役割や機能を理解している」が、全評価指標の中で最低評価であった。その他、「介護活動」の「報告は適切な時間にメモを活用し、5W1H（いつ・どこで・誰が・何を・どのように）を明確にした内容である」、「コミュニケーション」の「自分の考えを利用者に話している」も評価が低かった。

(3) 留学生の特徴

留学生に対する施設からの評価も、日本人学生と同様、「実習態度」の「健康管理」「礼儀」が高かった。「健康管理」の「体調管理ができ、欠席や早退がない」、「礼儀」の「提出物の提出日時や提出場所を守る」に全施設が評価点5をつけていたほか、「礼儀」の「朝の挨拶、帰りの挨拶を行うなど、礼儀正しく行動する」「遅刻や欠席をする場合は、実習先と学校に連絡する」の評価が高かった。しかし、「実習態度」の中では「積極性」が低い。特に自己評価は高いのであるが施設指導者による評価は低い。他に比べて著しく評価が低いのが「自己目標」である。評価指標別では、「自己目標」の「指導されたことを実践に生かすことができる」「実習自己目標が達成できた」、「コミュニケーション」の「自分の考えを利用者に話している」が、全評価指標の中で最低評価であった。

4. 3 学生の自己評価と実習施設指導者による評価の比較

(1) 日本人学生の特徴

ここでは、学生自己評価と実習施設指導者による評価にどのような違いがあるのかを検討する。日本人学生の場合は、「施設領域」以外の4領域で実習施設指導者による評価のほうが高いが、その差はいずれも0.2未満とわずかである。一方、留学生については、5領域すべてにおいて、学生自己評価のほうが高く、その差がいずれも0.4以上と、日本人学生の場合と対照的であった(図5)。

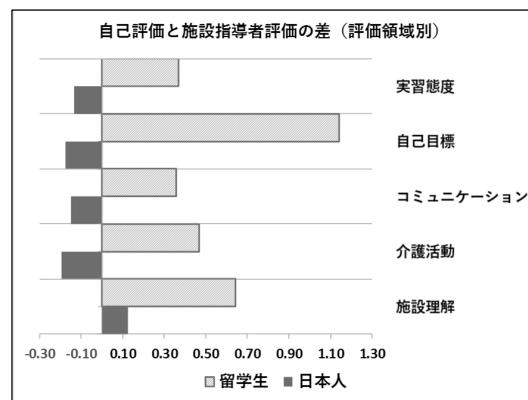


図5 学生と指導者の評価の差 (評価領域別)

日本人学生の場合、評価項目別(図6)に見ても、ほとんどの項目で実習施設指導者による評価のほうが高く、また、評価に大きな開きはなかった。差が最も大きかった評価項目は、「積極性」(学生3.31、施設3.70)で、次いで、「記録」(学生3.41、施設3.76)、「観察」(学生3.83、施設4.17)であった。逆に、学生自己評価のほうが高かった項目は、「守秘義務」(学生4.52、施設4.28)など4項目のみであった。評価着眼点別に見ると、「自己目標」の中の、「自分の立案した目標に向かって実践できる」は大き

な差がなかった（学生 3.76、施設 3.81）が、「振り返り」は施設指導者評価が大幅に上回っている（学生 3.56、施設 4.03）。また、「コミュニケーション」の「利用者との意思疎通が図れる」は大きな差がない（学生 3.88、施設 3.92）が、「職員との意思疎通が図れる」は施設指導者評価が大幅に上回っている（学生 3.11、施設 3.67）。これは学生の自己評価が極端に低いためである。

（2）留学生の特徴

留学生の場合、すべての評価項目及び評価着眼点において、学生自己評価のほうが高かった。その中でも群を抜いて開きがあったのが「自己目標」であり、学生自己評価 4.57 に対して実習施設指導者による評価 3.43 と 1.43 の差があった。「自己目標」の評価着眼点「自分の立案した目標に向かって実践できる」「振り返り」とも、ほぼ同じ開きがあり、目標設定・実践・振り返りのどの段階においても、留学生の自己評価が、施設指導者評価を大きく上回っていることが分かる。そのほか、「施設理解」の「施設の理解」「職種の理解」、「実習態度」の「守秘義務」「積極性」、「介護活動」の「生活支援技術」「報告」「福祉用具の適切な使用」で、自己評価と施設実習者評価の差が 0.5 以上であった。また、「コミュニケーション」において、「利用者との意思疎通が図れる」（学生 4.25、施設 4.00）に比べ、「職員との意思疎通が図れる」が自己評価と施設指導者評価の差が大きかった（学生 4.43、施設 3.43）。

（3）日本人学生と留学生の評価傾向

学生の自己評価とその学生を指導した施設指導者の評価との相関係数の分布（（図 7））をみると日本人学生の評価の多くが指導者評価と相関がある。0.7 以上の強い相関がある学生が一人、相関があると認められる 0.4 以上 0.6 未満の学生が 5 人、0.3 という弱いが相関が認められる者が 3 人と全員がある程度の相関が認められた。一方で、留学生は、2 人が 0.4、一人が 0.3 の相関係数があったが、3 人は相関が認められなかつた。学生の自己評価と実習施設指導者による評

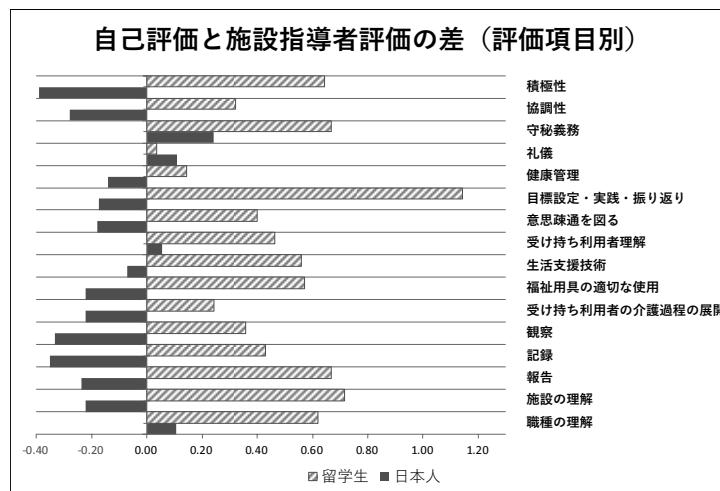


図 6 学生と指導者の評価の差 (評価項目別)

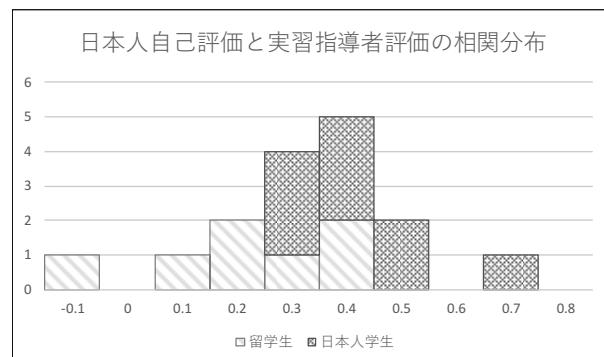


図 7 学生と指導者の評価の相関係数分布

価の平均で相関係数を求めるが、日本人学生は 0.63 で相関があるが、留学生は -0.21 で相関はなかった（表 2）。これらのことから、日本人学生は、評価の観点を理解し適切に評価していると言えるが、留学生は評価の観点の理解をしていないか、自己の現状を認識していない学生が多いと考えられる。

また、成績と自己評価及び施設指導者による評価の相関を調べた（表3）。日本人学生は、成績と自己評価に相関は見られず（-0.13）、施設指導者の評価と自己評価に相関があったことを考えると、今回の日本人学生は成績に関係なく評価力があったと考えることができる。実習先評価と日本人学生の成績は、0.38と弱い相関を認めることができた。成績の良い日本人学生はやや実習成績も良い傾向にある。留学生は、成績と自己評価とでは、相関係数が0.57で成績が良い学生ほど自己評価が高くなる傾向が認められる。一方で、実習先評価と成績とは、相関が-0.84と強い逆相関となった。成績が良いほど実習評価が低くなるという結果となった。留学生の学内成績への日本語力の影響は調査していないが、座学が多くあることを考えると日本語能力が成績に影響を及ぼすことが推測できる。日本語能力が低い留学生ほど実習に努力をしたとも考えられし、日本語のハンディを考慮して指導者の評価が甘くなったという可能性も否定できない。いずれにしても、データが少ないため参考程度にしておく。

表3 自己評価、実習先評価、成績の相関况			
日本人学生	G P A	自己評価平均	実習先評価平均
G P A	1		
自己評価平均	-0.13	1	
実習先評価平均	0.38	0.63	1

留学生	G P A	自己評価平均	実習先評価平均
G P A	1		
自己評価平均	0.57	1	
実習先評価平均	-0.84	-0.21	1

5 ルーブリックコメントから見える課題

5. 1 学生コメント

（1）実習態度

職員にわからないことを質問する姿勢が見て取れる一方で、聞いたことを行動に移せなかつたり、忘れて同じ過ちを繰り返してしまつたりしたことに対し反省しているコメントが目立った。比較的評価の高い領域であるが、「積極性」については評価が低い。行動に移せないという学生コメントにも一步前に出られない学生像が見えてくる。

（2）自己目標（目標設定・実践、振り返り）

毎日の目標設定が難しく、職員に協力していただいたとのコメントが複数あった。日々の授業の中で、どのようなことが目標になるのか具体的な事例を事前に示したり、目標の記述例を示したりするなど、今まで以上の工夫が必要と思われる。

振り返りについては、「指導者に自分の意見は伝えたが振り返れたかはわからない」など、目標に向かって実践した後意見は言えても、自分を成長させるための振り返りとなっているか判断できない様子が見受けられた。自分の成長度や課題が何であるか理解が不十分であると思われる。自分を成長させるための振り返り・省察の重要性を学生に伝え、様々な場面で振り返る機会を持たせる必要がある。

（3）コミュニケーション

コミュニケーションがよくとれる利用者とあまりとれない利用者がいることや、利用者の話を傾聴はできるが自分から話せないというコメントから学生の葛藤が見て取れる。ルーブリックの日本人学生自己評価結果からもそのことはうかがえ、コメントは学生の自信のなさを具体的に裏付けているといえる。職員とのコミュニケーションは評価得点が低いうえ、コメントからも自分から積極的に話しかけている

い様子がうかがえる。職員が学生に話しかけてコミュニケーションがとりやすい状況を作つてもらっているようである。

(4) 介護活動

受持ち利用者の理解が難しい、利用者の様子など観察したことを具体的に表現できないということを複数の学生がコメントしている。利用者の変化に気づいたときに報告を忘れたりうまく言えなかつたというコメントもあった。事実や様子をいかに表現して口頭で伝えるか、介護の状況をいかに記録に残すかということについて、実習前に十分な指導をするとともに、指導方法の工夫もさらに必要と思われる。

5. 2 評価者コメント

(1) 実習態度

指導者評価の分析でも「積極性」に課題が見出されたが、指導者コメントからも「指示待ちになっている」「控えめだった」などのコメントが多数あり、「積極性」の課題が具体的に記述されていた。

(2) 自己目標（目標設定・実践、振り返り）

自分の意見が言えないという指摘が多くあった。また目標について、指導者への発信がしっかりとできていないというケースが複数指摘された。留学生は、日本語能力の低さのためか、自分の意見を伝えることがほとんどなかつたようであり、留学生の日本語能力向上が課題である。

(3) コミュニケーション

受持ち利用者とコミュニケーションをとろうとする姿勢は評価されているが、「コミュニケーションをとる相手が偏っている」「傾聴はできても自ら話しかけることができない」などが指摘されている。このことは学生のコメントにもあった。特に留学生は、「自ら話していくイメージが感じられなかつた」「もう少し自分の考えを伝えても良かった」などと指導者からのコメントがあり、言葉のハンディによるコミュニケーション不足を指摘された。

(4) 介護活動

個別性の理解という点で「満足のいく結果が得られていなかつた」、努力は見られるがさらなる情報収集の努力を求めるコメントがあった。しかし、「終始真面目に取り組んでいた」というコメントや今後成長するためのアドバイスもあった。

留学生は、「同じことを何度も実践できない」「利用者の情報収集からのアセスメント、課題の明確化などの点で具体性に欠けていた」という指摘がある一方で、「職員が見落としているような情報も拾い上げていた」などと日本語能力のハンディを乗り越えた取り組み姿勢を褒めるコメントもあった。

6. 考察

(1) ルーブリック評価データ分析から

学生及び実習施設指導者による評価のデータを分析した結果を表4にまとめた。日本人学生の自己評価は指導者による評価と概ね一致するのに対し、留学生は指導者による評価と大きな違いがあり、さらに、より高く自己評価をしている傾向があった。実習施設指導者による評価では、日本人と留学生の間

に大きな違いはないことから、実際以上に自分を高く評価している様子がわかる。また、実習施設指導者からの「振り返り」の評価が低いこともあわせると、留学生の自己評価能力にやや問題があると考えられる。実習を振り返り今後の改善につなげていく姿勢を留学生に如何に持たせるかが課題である。また、職員との意思疎通については、留学生の自己評価は高かったが、指導者の評価は低く差が大きくあつた。指導者とのコミュニケーションの在り方も留学生の課題といえよう。

表4 評価データからの分析結果

①全般的に日本人学生よりも留学生のほうが、自己評価が高い。
②評価が高い実習態度の中でも、「積極性」が実習指導者評価、自己評価ともに低い。日本人学生は実習指導者より自己評価が低いが、留学生は実習指導者より高く評価している。
③自己評価が他の領域に比べ低いのは、日本人は「施設理解」、留学生は「介護活動」「コミュニケーション」である。
④自己評価が他の評価項目より低いのは、日本人は「施設の理解」「積極性」「記録」であり、留学生は、「受持ち利用者の介護過程の展開」「施設の理解」である。
⑤実習施設指導者による評価は、全体的に見れば、日本人と留学生の間に大きな差はない。
⑥実習施設指導者による評価で低い評価は、日本人は「施設理解」、留学生は「自己目標」である。評価項目別では、日本人学生が低い評価項目は「施設の理解」「積極性」「職種の理解」、留学生は「施設の理解」「目標設定・実践・振り返り」「積極性」であり、「施設の理解」「積極性」が共通して低い。
⑦日本人学生は「積極性」「記録」「観察」において自己評価が指導者による評価よりかなり低い。
⑧学生の自己評価と同様、実習施設指導者による評価も、日本人、留学生とも「実習態度」が高い。特に、両者ともに、「健康管理」「礼儀」が高く、「守秘義務」「協調性」と続く。
⑨留学生の自己評価は、すべての領域において実習施設指導者による評価を上回っており、特に「自己目標」において顕著である。
⑩施設職員とのコミュニケーションについては、日本人の自己評価は極端に低く実習指導者による評価よりも下回っている。一方、実習施設指導者が低く評価しているにも関わらず、留学生は自己評価が極端に高い。
⑪日本人学生は自己評価と施設指導者による評価に相関が見られるに対し、留学生は相関がない。

(2) 前回調査「実習Ⅲ」との比較

留学生が高い評価をつける傾向にあること、実習施設指導者の評価と相関がない傾向にあることは、前回の実習Ⅲと同様の傾向である。また、日本人学生の評価がやや低めである点や多くの学生に施設指導者と相関が認められることも実習Ⅲの結果と同様である。留学生の評価力に課題がある。

日本人学生も留学生も「実習態度」の「健康管理」「礼儀」「守秘義務」「協調性」の自己評価並びに実習施設指導者の評価が高いが、同じ「実習態度」の「積極性」が両評価ともに低い傾向にあることも前回と同様である。また、「施設の理解」も両評価ともに低い傾向にあることは前回同様である。

また、日本人の「職員との意思疎通が図れる」が両評価ともに低くあった点は前回と同じ傾向にある。留学生は、「職員との意思疎通が図れる」の自己評価は低くはなかったが、指導者からの評価は低かった。本稿においては、学生へのアンケート調査結果は触れていないが、学生の声として、実習Ⅲに向けて自分がすべきこととして、職員への積極的な質問を課題に挙げていた。学生の積極性、実習における職員との意思疎通は大きな課題といえる。特に留学生については、意思疎通が図れていると思っているが指導者からはそう見えない点が課題である。

「目標設定・実践・振り返り」は、前回は、両評価ともに低くはなかったが、今回、日本人学生は自己評価が低く、留学生は実習施設指導者による評価が低い傾向であり、前回とは異なる結果となった。

(3) 今後

いくつかの点で、調査対象学生が異なり、実習種別が異なる介護実習におけるループリック評価の結

果で同じような傾向があった。少なくとも本学学生の実習でこの傾向があるということであり、弱みとなっている点を克服するために、授業改善や実習指導の在り方について検討を進めていきたいと考えている。学生のこのような強み弱みの傾向については、介護実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと成長していく過程でどのような変化があるか、どの時点で克服されるものかなどについて、引き続き調査を続ける。また、現在、ループリック評価表の改善を進めている途上にある。「介護福祉士としての目標レベルをさらに上の基準として示してはどうか」「介護実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと実習内容や求められることが異なる実習において、それぞれの段階でより適切に対応した指標を加えることはできないか」「評価指標や着眼点に重みをつけて総括得点をつけられるようにしてはどうか」などが課題となっている。学生の成長のための評価と総括評価に使えるループリックのさらなる改善とその活用について検討を進めていきたい。

なお、本研究は、JSPS科研費 課題番号 JP19K02261 の助成を受けたものである。

引用・参考文献

- ・ 杉崎 京子、松永 美輝恵、宮本 佳子、楠永 敏恵、吉賀 成子（2018）「介護実習の実習目標達成を支援するための取り組みと課題：「実習課題ループリック」の作成と活用結果から」『介護福祉学』25巻1号、pp.1-10.
- ・ 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦（2019a）「介護実習でのループリック評価の導入による効果と課題」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第5号、pp.28-39.
- ・ 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦（2019b）「介護実習におけるループリック評価の導入、大学教育学会第41回大会発表要旨録」.
- ・ 松下佳代（2012）「パフォーマンス評価による学習の質の評価 - 学習評価の構図の分析にもとづいて - 」『京都大学高等教育研究』18巻、pp.75-114.
- ・ 宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、重松義成、杉崎京子（2017）「初学習段階における「介護実習記録」を課題とするループリック評価の施策と活用」『帝京科学大学紀要』Vol.13 pp.77-86.
- ・ 文部科学省（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて - 生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（中央教育審議会答申）」.
- ・ 林和歌子、大内義広（2017）「ループリックを用いた介護実習評価法の開発」『城西国際大学紀要』第26巻、第3号、pp.37-50.
- ・ 鷺尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章（2019）「介護実習のループリック評価データから見えてくるもの」、日本教育工学会第35回全国大会予稿集.
- ・ Stevens, D., Danelle, L., Antonia J. (2013) Introduction to Rubric: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning. Stylus Publishing (=佐藤浩章監訳、井上敏憲、保野秀典訳（2016）『大学教員のためのループリック評価入門』玉川大学出版部.